

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12334

研究課題名（和文）1930年代アメリカにおける「忘れられた人々」をめぐる写真とテキストの表象

研究課題名（英文）The Representation of Photography and Texts of "Forgotten People" in the 1930s America

研究代表者

高村 峰生（TAKAMURA, Mineo）

関西学院大学・国際学部・准教授

研究者番号：90634204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：ウォーカー・エヴァンスとジェイムズ・エイジの『今こそ有名な人々をたたえよ』を中心に、1930年代アメリカにおける写真とテキストの関係について考察を深めた。1929年の大恐慌以来、都市労働者や農村部の貧困が社会的な背景を伴って注目される中、FSA（農業安定局）は多くの写真家たちを雇用し、「忘れられた人々」の写真による記録を作った。これらのリアリスティックな写真はアメリカ写真におけるモダニズムを形成すると共に、現象学的な「もの」への視線や、微細に「もの」を描写する文学的技巧を産んだ。こうした美学的達成が、当時のアメリカ政府の社会主義的政策とどのように関連しているのかについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1930年代、ニューディール期のアメリカ文化・文学は、従来、労働者や農業従事者に焦点を当てたリアリスティックなものとして理解されてきた。本研究は写真というメディアが、この時期に大衆的な普及を見るとともに芸術的な表現媒介としての地位を確立したことに注目し、その美学的達成を検討すると共に言語文化への影響を考えることで、モダニズム芸術全体における写真の位置づけの評価を新たな視点のもとに置くことができた。

研究成果の概要（英文）：Throughout the research, I examined the relationship between photography and texts in 1930s America, especially focusing on the single text Let Us Now Praise Our Famous Men by Walker Evans and James Agee. Since the Wall Street Crash in 1929, poverty-stricken urban laborers and farmers attracted social attentions. FSA employed a lot of photographers and created records of "forgotten people." These realistic photographs formed American Modernism in photograph and created phenomenological views on "things" and invented the literary method of the minute description of "things." I consider how such an aesthetic achievement is related with the socialistic policy of the American government at the time.

研究分野：英語・英語圏文化

キーワード：写真 アメリカ モダニズム ウォーカー・エヴァンス ジェイムズ・エイジ

1. 研究開始当初の背景

1930年代の言語芸術、映像芸術において労働者や貧困層が描かれるようになったのは恐慌下における世界的な現象であり、同時期のマルクス主義の興隆とも深く結びついていることは従来指摘されてきた。しかし、「忘れられた人々」を表象するという営為は、それまで表象されてこなかった国民たちの声やイメージを具体的に可視化するという意味で、国家の「全体」を可視化し、国民意識の形成にも大きな役割を果たしたことについては再考する必要がある。「忘れられた人々」という言葉を多用し、白人労働者階層から支持されたトランプ政権が誕生したからである。「忘れられた人々」という言葉は、発展した都市圏の経済や文化から取り残された人々を指す言葉であるが、このように周縁化されたもの全体を指す言葉が誕生したこと自体が国民を「全体」と見る想像力の定着を意味し、1920年代までアメリカ社会や文化と明確なコントラストを成している。「周縁的なもの」と「国家的なもの」を想像的に結びつけた事業としては、たとえば、1935年以来政府の農業安定局(以下FSAという略号を用いる)特にその情報部局長を務めたロイ・ストライカーの主導で進められた「アメリカ人にアメリカを紹介する」プロジェクトがある。このような試みは、無名の人びとを写した膨大な写真作品群を生み出した。これら極めて個人的なものの表現が直接に国家的な全体像と結びついたということは、1930年代のアメリカにおけるイメージと国家の関係、ならびにそれ以降現在に至る国家政策と国民文化の関係を考えるうえで極めて重要である。

個人の表情の集合としてイメージされた「忘れられた人々」が国民的苦境と重ね合わせられるさまは、イメージとテキストの同居する作品の詳細な検討によって明らかにされうるだろう。本研究では、FSAによるプロジェクトで活動した写真家たちの作品群を概観するとともに、写真家と作家による二つの作品、アースキン・コールドウェルとマーガレット・パーク＝ホワイトの共作である *You Have Seen Their Faces* (1937)、ウォーカー・エヴァンスとジェイムズ・エイジャーの共作である *Let Us Now Praise Famous Men* (1941、ただし1937年に完成していた)を詳細に検討する。前者については、すでに南部の貧困層の暮らしを鮮やかに描き出した *Tobacco Road* (1932)や *God's Little Acre* (1933)という小説によって人気作家となっていたコールドウェルが、自らの描いていることが南部の現実を忠実に描き出したものであることを証明するために、雑誌 *Fortune* の写真家であったパーク＝ホワイトと組んで南部をまわったものであり、資本主義経済によって生まれる経済的格差や人種差別の問題を、交互に配置された南部に暮らす人々の写真と彼らの実情を記した散文によって訴えかけている。*Let Us Now Praise Famous Men* は、三つの家族についての事実に基づいた物語が交錯する小説であり、エヴァンスの写真はまとめて冒頭に置かれている。ここでは、それぞれの家族の顔がエヴァンスの写真によって捉えられている。私はこれらイメージとテキストの同居するハイブリッドな作品について、どのような相互作用が起きているかを詳細に検討し、そのような作品が成立した1930年代の「忘れられた人々」の表象のあり方について考察することにした。これらの作品は本当に忠実に南部の人びとを描き出すことに成功しているだろうか？芸術性や美的なものを優先するがために、不都合な事実を隠蔽したりゆがめたりはしていないだろうか？彼らの貧乏白人に対する姿勢には侮蔑的なところはなかっただろうか？政治思想的には社会主義的・マルクス主義的なものや、全体主義的なものとどのように結び付いているだろうか？そして、メディアはこれらイメージとテキストの融合した作品をどのように伝播し、1930年代以降の文学の文体をどのように変容させただろうか？

2. 研究の目的

このような疑問に答えていくうえで、重要視した概念は「事実性」、「顔貌性」、「近接性」である。これらの仮説的な視座が本研究をユニークなものとする。本研究は1930年代の写真と文学に共通するものとして、「事実」へどれだけ近づくことが出来るかという衝動が存在することを、具体的な作品の検討を通じて証明することを目標の一つとしている。1930年代以前からのモダニズム的な実験的な文体や都市文化の表出の問題関心を引き継ぎながらも、大恐慌下の芸術家たちはしばしばドキュメンタリー的な手法を大胆に取り入れ、事実と虚構のあいだの境界を揺り動かした。アメリカのモダニズム写真が構成の美をしばしば強調したのに対して、ウォーカー・エヴァンスらFSAの写真家たちは「事実を伝える」という義務を負っていた。しかし、これは単に義務ではなく、彼らの芸術的衝動でもあった。とりわけ彼らは南部の貧乏白人の「顔」に強い関心を抱き、そこに接近することを欲していたように思われる。単に客観的なポートレート撮るだけでなく、FSAの写真家たちは貧乏白人の「顔」に何らかの人間の本質を見出し、それへ接近せんとしていた。ここにはおそらく、対象を捉えようとする芸術的動機だけでなく、南部白人が彼ら芸術家たちとは全く別の本質的な内実を有しているという優生学的な差異化の意識も働いていたかもしれない。さらには、ビル・ブラウンらの *Thing Theory* によって明らかにされてきたように、モダニズムの芸術家たちは物質的な「もの」に本質を見出していたが、1930年代の作品の「人間の顔」への関心の深まりはそれとは対照的なものと理解できるかもしれないので、このあたりも検討する。しかし、いずれにせよ、観念的なものよりも物質や身体そのものを描き、捉えようとする写真家たちの強い衝動は、文学表現にも大きな影響を与えずにはおらず、ドキュメンタリー的なものへの意志と結びついたのである。このような特徴が言語と写真とを問わず現れるのは、「リアリティ」の水準がメディア技術の発達や大衆文化の深まりによって変化したということと強い関係を持っている。「事実」とは絶対的なものではなく、それ自

体が歴史的な条件によって規定されたものであることに注意しなければならない。

「事実性」、「顔貌性」、「近接性」といったキーワードは、研究代表者がこれまで『触れること
のモダニティ』(2017)という著作につながる研究で考察してきた、20世紀前半における身体の
問いと連なっている。写真によるイメージは単に視覚的なオブジェクトではなく、見る者の身体
的認識に働きかける触覚性を有している。そして、芸術における「事実」がある真实性を有する
ためには、それがイメージによって引き寄せられるような「近接性」を有していなければならない。
「顔貌性」という点については、以前イングマール・ベルイマンの映画を題材に考察したこ
とがあった。「顔」は日常においても単に身体の一部と考えられておらず、その人の人格や来歴
とも結びつけられることが多い。20世紀の視覚芸術においては、しかし、有機的な人格と顔貌
の結びつきは変容し、遠くの他者を近くに感じさせるようなメディアとなった。20世紀以降の
大衆は、メディアによって流通した著名人たちの「顔」に囲まれて生活していると言ってよいが、
エヴァンスら FSA の写真家たちがドキュメンタリーの手法で示した「顔」はそのような資本主
義的な顔とは異なる、他者性を有している。1930年代の写真家や作家が試みたのは、このよう
な「忘れられた人々」の顔のある種の文化的抵抗として表象することであったに違いない。しか
し、ここに歴史的アイロニーがあり、上述したように全体主義的なものは可視化された大衆を想
像的な「全体」の基盤としているのであり、アメリカにおける左翼リベラル主義と全体主義のせ
めぎ合いが演じられているのである。従来あまり強調されてこなかったアメリカの全体主義傾
向の広まりも照らし出すことで、本研究は左翼主義的なものと強く結びついていた1930年代ア
メリカ文化・文学のイメージの修正をはかる。

3. 研究の方法

写真というイメージのメディアと文章という言葉のメディアの交錯について考察するこの研
究においては、1930年代の文学作品や写真を多く見たり読んだりするだけでなく、それらが映
像作品やポスターなどにおいてもどのように表出されているか、ということも幅広く考察の対
象とする。また、「事実性」、「顔貌性」、「近接性」といったキーワードをめぐる考察にも必要な
ため、フッサールやメルロ＝ポンティなどの現象学の書物も読みこんで、参照する。伝統的な文
学研究の範囲だけでなく、映像学、美学、哲学などの知見も取り入れた研究となるが、基本的
にはテキストを対象としており、学会での発表や論文執筆を通じて成果を発表する。

4. 研究成果

2019年6月2日にはアメリカ学会のシンポジウムにおいて、「触覚的直接性と視覚的シンメト
リー—ジェームズ・エイジーとウォーカー・エヴァンスの『今こそ有名な人々をたたえよ』にお
ける「忘れられた人々」の表象と倫理」と題する発表を行い、同書においてアラバマ州の小作農
家たちがどのように写真と言葉によって表象されているのか、またそこには写真家と小説家の
どのような倫理意識が働いているのかということについて考察を行った。また、時代と場所が違
うものの、イメージとテキストのかかわりについて考察した成果としては、2018年6月30日の
日本ロレンス協会全国大会におけるシンポジウムで、「モダニズムにおける「快楽」と「本物性」
—ロレンス、ブルースト、写真」という発表を行った。ここでは、ロレンスが人間の身体性を
はく奪するものとして写真を批判していたのと同時代に、ブルーストは人間の存在を代替する
ものとして写真を捉えるような文章を『失われた時を求めて』の中に書いていたことに注目し、そ
れらの記述を比較した。これら二つの成果についてはまだ論文にまとめて文章化していないの
で、それは今後の課題としたい。また、イメージとテキストのかかわりという大きな枠組みの課
題については今後も研究を継続していきたい。

本研究はもともとトランプ政権の誕生という同時代の状況を踏まえたものであったが、研究
自体も1930年代という当初の対象よりは同時代を対象としたものに広がりを持つようになり、
同時代におけるディストピア表象により強い関心を持つようになった。2019年に明治学院大学
言語文化研究所の発行する『言語文化』に寄稿した論文、「ディストピアと宗教：マーガレット・
アトウッドの『侍女の物語』とフィリップ・K・ディック『高い城の男』のドラマ化をめぐる」
においては、二つのディストピア的な設定を持つ小説の近年におけるドラマ化を考察した。また、
雑誌『ユリイカ』の2019年9月号に寄稿した「「デュマは黒人だ」—『ジャンゴ 繋がれざる者』
における奴隷制度とその外部」という映像作品論もまた歴史的なナラティブの形式をとったディ
ストピアものであると見ることもでき、広い意味での研究成果と言える。

2020年度よりは現代におけるディストピアを課題として科研費による研究を行っており、本
研究が計画された当初においては想定していなかったような研究の発展を遂げることとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高村峰生	4. 巻 15
2. 論文標題 1920年代のホビとプエブロ D・H・ロレンスとウィラ・キャザーの交差する時間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美学芸術学論集	6. 最初と最後の頁 138-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高村峰生	4. 巻 36
2. 論文標題 ディストピアと宗教：マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』とフィリップ・K・ディック『高い城の男』のドラマ化をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 82-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高村峰生	4. 巻 51-17
2. 論文標題 深い皮膚 『神よ、あの子を守りたまえ』における商品化された「黒さ」と触覚的身体	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ・特集トニ・モリスン	6. 最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高村峰生	4. 巻 51-16
2. 論文標題 「デュマは黒人だ」 『ジャンゴ 繋がれざる者』における奴隷制度とその外部	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ・特集クエンティン・タランティーノ	6. 最初と最後の頁 120-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高村峰生	4. 巻 51-8
2. 論文標題 「稲妻（の速さ）で歴史を書く」 『國民の創生』と『ブラック・クランズマン』における引用、真実、歴史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ・特集スパイク・リー	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 7件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 1920年代のホピとプエブロ D. H. ロレンスとウィラ・キャザーの交差する時空間
3. 学会等名 第13回神戸大学芸術学研究会 「コンタクト・ゾーンとしての身体 アメリカから考える」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 "The Economy of Sympathy in the Dystopian World." "Performing Empathy: When Literary Texts Are Acts of Kindness."
3. 学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association 116th Annual Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 モダニズムにおける「快樂」と「本物性」 ロレンス、ブルースト、写真
3. 学会等名 第49回日本ロレンス協会全国大会、シンポジウム「ロレンスに触れる 象徴、劇場、写真」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 ヘミングウェイ作品の狩りと釣りにおける法的（無）意識
3. 学会等名 日本ヘミングウェイ協会第30回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 オハイオの痛み、あるいはヒルビリーは存在しない J. D. VanceのHillbilly Elegyと政治的情動の問題
3. 学会等名 第91回日本英文学会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 触覚的直接性と視覚的シンメトリー ジェイムズ・エイジーとウォーカー・エヴァンスの『今こそ有名な人々をたたえよ』における「忘れられた人々」の表象と倫理
3. 学会等名 第53回アメリカ学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高村峰生
2. 発表標題 トランプ時代におけるディストピアとノスタルジア 映像作品の分析を通じて
3. 学会等名 関西学院大学国際学部教授会研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----